

柳瀬地区本郷・城の歴史遺産と柳瀬川の自然巡り

2023-3-19 記 伊藤裕章

- 実施日 2023-3-16 (木) 10:00~13:00 ■参加者 25名
■集合 JR 武蔵野線東所沢駅前広場

柳瀬地区は市の東南端にあり、馴染みが薄い方が多いようですが、柳瀬川流域には古くから人々が住みつき、縄文遺跡や7世紀後半（古墳時代）の横穴墓群が残されているほか、8世紀半ばには東福寺が建立され、戦国時代には滝の城が築かれるなど、市中心部とは少し異なる歴史を歩んできました。この柳瀬地区のうち本郷・城の歴史遺産を探訪し、柳瀬川沿いの自然も満喫しようというのが今回の企画でした。

3月16日の市の最高気温は20.8度。汗ばむほどの快晴となりました。「ところざわサクラタウン」の開業に伴い、本棚を模した駅舎に模様替えしたJR東所沢駅に午前10時前、ほぼ予定通りの25人が集合しました。

今回案内をお願いしたのは東所沢地区の「柳瀬郷土史研究会」会長の富川正孝さんです。案内をお願いしたところ、A4のロードマップと史跡の説明書まで作成していただき、5km強、3時間強の行程の所要所で、大変わかりやすいご説明をいただき、参加者の様々な質問にも快く応じてくださいました。ありがとうございます。

○名古屋公園、一等三角点

最初に立ち寄ったのは「名古屋公園」。名古屋は旧字名ですが、館があったことを意味する地名とされ、富川さんは「近くの滝の城に由来するのでは」と推理されています。

次は、柳瀬保育園の園児たちに「なんで来たの？」とかわいく誰何されながら「本郷一等三角点」に向いま



した。三角点は地図を作成するための基準点で、「一等」は40kmごとに設置されたので、県内には11カ所、市内ではここだけです。今は防風林に囲まれているようですが、柳瀬川の段丘の上の標高57.3mに位置し、冬には富士も望めるので、かつては適地だったのでしょう。

○東福寺、金山調整池、金山緑地公園、柳瀬川沿いの道

段丘崖の急坂を下ると、右手に真言宗豊山派東福寺の高さ約 20 尺の白い観音像、足下には同寺の不動明王が従える「三十六童子」の石仏群が並んでいました。「本郷」は市の東部一帯を指す安松地区の中心部を意味する地名で、東福寺は聖武天皇の御代の 749 年に行基菩薩が創建したと伝えられ、この地が古くから開けていたことを物語ります。

本尊の不動明王像は奈良時代の行基の作で、市の指定有形文化財の木造阿弥陀如来座像は鎌倉時代から室町時代の作とされています。境内には、明治 9 年に成田山新勝寺より勧請された成田山不動堂があり、近くの不動坂から移築した乳不動堂も並んでいました。



金山緑地公園（東京都清瀬市）

一帯は農振地域で、のどかな農村風景を抜けて都県境を越え、清瀬市の金山調整池へ入りました。柳瀬川の洪水対策で平成 6 年に整備されたもので、湧き水の鑑賞池と擬木製の散策道が備えられ、自然の水辺を再生すべく様々な樹木も植えられていました。池の小島には、鷺やカルガモの姿も。カワセミが飛来するとカメラの放列ができるそうです。

次は隣の清瀬金山緑地公園へ。清瀬市が「武蔵野の風と光」をテーマに武蔵野の自然の再現をめざしてつくった公園で、様々な石の彫刻も配されています。東京で桜の開花が宣言された直後でしたが、福島県から移植された 3 本の「三春の滝しだれ桜」はほぼ満開でした。

○放光王地蔵、伝霧吹き井戸跡、

所沢市内に戻り、少し北に進むと、畑地の中に、六道のうち人道（人間道）のお地蔵様、放光王地蔵のお堂がありました。いぼ取り地蔵、北向き地蔵とも呼ばれているそうです。

次に、「伝霧吹き井戸跡」に立ち寄りました。ここには昔から竜が住んでいたが、近くに城がつけられたことに怒り、将兵に悪さをしたと伝えられています。弘化 3（1846）年に建てられた大峰大権現・成田山不動明王・鎮守八幡宮の石塔も残っています。

○滝の城址公園、滝の城址

最終目的地である「滝の城」は、柳瀬川の段丘崖につくられた城で、崖下にはかつて水田がつくられていましたが、周囲の都市化などで耕作ができなくなり、昭和 54 年に野球場やテニスコート、蓮池や散策道を備えた滝の城址公園という総合公園になりました。



これに先立つ昭和 51 年、城址の崖面の防護工事中に偶然、9 基の横穴墓群が発見されました。周辺にはさらに 10 基以上の横穴墓も見つかりました。出土品から、古墳時代と呼ばれる 7 世紀後半につくられたと見られています。今は埋め戻されています。トイレ休憩の後、急坂を上り崖上の城址へ。疎らに薄紫色のカタクリの花が咲いていました。

滝の城は柳瀬川に面する南側に約 25 ㍍の断崖、東側には柳瀬川と東川の合流点があり、自然の防御がありますが、北側は台地が広がるだけの平山城です。このため、将兵の詰める 3 つの郭（くるわ）以外は、空堀と呼ばれる水のない堀を張り巡らせました。城の広さは、東西 350 ㍍、南北 200 ㍍、面積は 63,000 m²と、東京ドームの 1.35 倍ありました。

外郭と呼ばれる城の周縁は現在住宅地になり、さらに東側には、城の名の由来となった「金津の滝跡」がありました。草むらになっていて、水の流れは見えませんでした。大手門跡を通して、三の郭、二の郭をまわり、本郭跡に建てられた城山神社を参拝しました。神社の南側から崖下を眺めると、崖に沿って JR 武蔵野線が走り、柳瀬川の向こうに清瀬の市営団地や住宅地、さらに向かい側の断崖が見えました。



所沢市は今も順に発掘調査をしています。築城の時期や築城した人物は特定できていません。「滝の城保存会」の資料「埼玉県指定史跡『滝の城跡』」によると、関東管領山内上杉氏の家臣で武蔵守護代などを務めた大石氏が 15 世紀後半に築いたという

説と、山内上杉氏と対立していた扇谷（おうぎがやつ）上杉氏の家老で、江戸城や河越城を築いた太田道灌が築いたとする説が紹介されています。最近の発掘調査では、扇谷上杉氏の「渦巻きかわらけ（土器）」も発掘され、同氏が城主だった時期もありそうですが、奪い合いをしていた可能性もあり、築城主はわかりません。

確かなのは、北条早雲が興した後北条氏が 1546 年の河越夜戦で扇谷上杉氏を破った後、

滝の城も支配下に置いたということです。

城の周囲には、北条氏が多用した障子堀という空堀を増設し、守りを固めた跡が発掘されています。ただ、そうした努力も空しく、1590（天正18）年の豊臣秀吉による小田原攻めの際に、浅野長政勢が空堀のある北側から攻め入り、1日で落城させたということです。城はそのまま廃城となりました。市の最近の調査では、かつて6㍍前後もあった深い堀が、場所によっては2㍍余の浅い堀に埋め戻されたとみられる跡が見つかっており、それがあつけない落城に繋がったのかも知れません。

この日の探索はここまで。城バス停で解散し、計ったかのように到着した路線バスに乗ることができました。

（参考資料）

- ・柳瀬地区散策「本郷・城地区編」 柳瀬郷土史研究会編
- ・柳瀬（本郷・城）地区 散策マップ 柳瀬郷土史研究会編
- ・「埼玉県指定史跡 滝の城跡 発掘調査概報」所沢市 文化財保護課資料

活動担当 Eグループ

梅津博紀、小川雅愛、國谷征治、伊藤裕章